

# 《論義ビヂテリアン大祭》をめぐって

吉川和夫

国立劇場演出室の田村博己さんから「秋の声明公演で、論義に基づいた新しい作品をやりたいのだけど、作曲家・音楽監督として相談にのってくれませんか」という電話をもらったのは、一昨年の冬のことだった。私は、以前から田村さんの仕事ぶりや人柄をとても尊敬していたから、この、私と同世代の演出家の仕事のお役に立てることだったら、とも二もなくお答えした。ただ、声明でいうところの「論義」には、音楽的な要素が少ないことは承知していたので、さて具体的にどんな仕事になるのやら、初めは皆目見当がつかなかったのだが。

声明の「論義」（論議とも書く）は、経義を問答によって明らかにしていくもの。現在では、問答の文言も完全に決まっています、与

えられた難問を前に途方にくれる様子まで指定してあるくらい様式化されているのだが、かつては問いに対して知識の蓄積をもとに、自分自身の見解を述べる口頭試問だったようだ。お坊さんの学力試験、昇進試験のようなもの、とも思っていただければよいだろう。従って、音楽的には「唄」「散華」など四箇法要に含まれる曲のように、短い文言を母音を長く引き延ばしながら詠唱的に歌いあげるといっても、大量のことばを抑揚付きで読誦していく要素が強い。

何日かして、また田村さんから電話。「論義を生かすにふさわしいテキストを考えたいんだけど。宮沢賢治の『ビヂテリアン大祭』なんです」

賢治と聞いて、もうこの仕事から逃れるわけにはいかない、と思った。ビヂテリアン（ヴェジタリアン）、つまり菜食主義者と反ビヂテリアンが互いに自分たちの考え方の正当性を主張し論争しあうお祭り、というこの物語の設定は、確かに「論義」を手がかりに新しい作品を作るのにはふさわしい。その後何回かの打合せのうちに、ビヂテリアンを声明の語りのスタイルで、反ビヂテリアンを能狂言の語りでという方針が固まった。ビヂテリアンを担当する声明師は、国立劇場演出室が長年手掛けてきた「新作声明」に常に果敢に挑戦しておられる新井弘順さん、孤嶋由昌さん、海老原広伸さんといったベテランの方々、狂言師扮する反ビヂテリアン役は、大蔵流の山本東次郎先生をはじめとする山本家一

門のみなさんが、それぞれ引き受けてくださることになった。

上演台本は、田村さんと私とで共同執筆した。田村さんが初稿を書き、それを私がワープロに打ち込みながら、加筆したり意見の交換をする。その段階で、「ビヂテリアン大祭次第」の後半部分として原作中に記述がみられるものの、賢治はその内容を書き残さなかった祭歌合唱・祈禱・閉式挨拶などについて、賢治の他の作品（詩・和歌など）や日記から引用して補っていくことにした。また、「論義」の中心部分となる原作中の「論難反駁」については、構成の関係から多少の削除や入れ替えは行いものの、原文を変えることはせず、また賢治が思い描いた大祭会場の雰囲気も、できるだけ再現することにした。

声明には、博士と呼ばれる伝統的な音の記譜法がある。博士は宗派によって書き方が異なるし、僧侶の方々も最近では西洋音楽の五線譜を難なく読みこなすので、《論義ビヂテリアン大祭》では、伝統的な博士を参考に独自の記譜法を設定し、また一部分五線譜なども併用して、ビヂテリアンの語るすべてのことばにフシ付けを行った。

台本作成やフシ付け（作曲）をしなから、ずっと気になりつづけていたことがある。それは、賢治が書いたオリジナルの文章を尊重するとはいうものの、初めて聴く聴衆にそのことばの意味が伝わるかどうか、という点だった。例えば「よい感官はよいものを感じ悪い感官はいいものも悪く感ずるのであります」といった文章。これは食物の味の感じ方について言っている部分なのだが、「感官」ということばは、本を読み字面を見ればある程度想像がつくだろう。しかし「かんかん」と発音されるだけの舞台作品で、果たして感覚器官ということが分かるだろうか。しかし、こういった悩みはすべて杞憂だったようだ。賢治の書いたことばは語られた歌われることで、こちらが想像する以上に立ちあがってくる。初演の客席には、賢治の主張やユーモア、また「まるで速かに速かに」といったような「賢治語」とでもいうべき不思議ないまわしまでが、音に変換されたメッセージとしてダイナミックに伝わってきた。

賢治が、音楽に対して深い関心を寄せていたことはよく知られている。自分で作曲や作詞を試みたりもしている。だから賢治の文章

は音楽的なのだ、ということではなく、そもそも彼の文章自体が「音楽」として自立している。おそらく、いつもいつも声に出して読みながら、あるいは奔放にフシを付けて歌いながら、推敲を重ねていったのだろう。

賢治の書いた詩や文章をテキストにして、たくさんの作曲家が曲を作っている。しかし、どんな作曲家がどんなスタイルで書いても、作曲家が自分の素顔を見せる隙を与える間もあらばこそ、その曲には必ず賢治の素顔が現れる。これはすごいことだ。だが、これからも賢治をテキストとした音楽作品は作られ続けていくだろう。そんな魅力を持った膨大な量の文章を、大半が未完成のまま書き散らかしていった賢治は、作曲家にとって本当にツミナヒトだと思ふ。

（声明と狂言の語りのための《論義ビヂテリアン大祭》は、一九九一年十一月十五日、国立劇場小劇場において初演された。）